

まえがき

堀 潤之

関西大学文学部総合人文学科映像文化専修は、2016 年度に開設 11 年目を迎え、今年度末にめでたく卒業する学生たちは 8 期生にあたります。わたし自身は、映像文化専修でゼミを担当するようになる前にも 3 年間にわたってフランス語フランス文学専修（現フランス学専修）にてゼミを受け持ち、また 2010 年度の在外研究時にはゼミを担当しなかったので、カウントしてみれば実は今年度のゼミ生はちょうど 10 期目の学生たちでした。

それを記念して、今年度から堀ゼミの「卒業論文集」を作成することにしました。ゼミ生には周知のことですが、堀ゼミでは従来からホームページで、もうすぐ 100 本に到達しようとしている過去のすべての卒業論文の論題を掲げるとともに、全文をパスワード付きの PDF ファイルで提供し、卒業生たち自身が学生時代を振り返るためのよすがにすると同時に、これから卒業論文を書こうとしている 3・4 年次の新たなゼミ生たちの教材としても大いに活用してきました (<http://www003.upp.so-net.ne.jp/jhori/teaching.html>)。その試みは継続するつもりですが、加えて、冊子体としてもゼミ生に配布することにした次第です。造本が美しいとは到底言えない代物ですが、情報がますます脱-物質化していく風潮に抗って、物理的な重量感を備えたオブジェとしてもゼミ生たちの成果を見届けてほしいと願っています。

ではここで、「卒業論文集」に収録されている 9 本の卒業論文について、簡単に内容を紹介します。つつコメントしておきましょう。2 月に行われた口頭試問では、主査のわたしからだけでなく、副査の先生方からも色々厳しいコメントを頂戴しましたので、以下ではそれも踏まえて、改めて総合的な所見を記すことにします。

「ピーター・ジャクソンの世界」は、『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズで世界的に有名になったニュージーランド出身の映画監督のモノグラフィーとして、非常に綺麗にまとめられた論文です。ティム・バートンにも似た独自の世界観を持ち、レイ・ハリーハウゼンの流れを汲むモンスター演出を行い、最新の映画テクノロジーも飽くなく追究するジャクソン監督の肖像が、的確な作品分析とインタビュー等の文献調査を組み合わせた読みやすい文章で描き出されています。作家論は本来、取り上げている映画作家の特異性を明らかにするための枠組みですが、本論文を読むと逆説的なことに、むしろジャクソンが現代ハリウッドの様々な流れの結節点にいる人物のようにみえてきます。明示的に比較対象とされているバートン以外にも、ハリーハウゼンの影響下にあたり、テクノロジーにこだわりをみせている他の何人もの監督たちの名前が頭に浮かんでくるからです。その点が本論文の豊かさであると同時に、作家論の観点から見たときの弱点でもあると感じました。

「メディアがみせる恐怖——怪談からJホラーへ」は、『邪眼霊』(石井てるよし、1988年)や『女優霊』(中田秀夫、1996年)から、『リング』(中田秀夫、1998年)や『着信アリ』(三池崇史、2004年)を経て、『回路』(黒沢清、2001年)に至るJホラー初期の著名な作品群を題材に、それらが広い意味での「メディア」とどのように関わっているかを、怪談との比較を交えながら論じたものです。着眼点はたいへん面白く、ベンヤミンに由来する「視覚的無意識」や「霊媒としてのメディア」がホラー映画の演出と本質的な関わりを持っていることはさらに深めていくべき論点でしょう。惜しむらくは、そもそも「メディア」が登場する余地がほとんどない怪談を比較対象に据えたことで、かえって論点がぼやけてしまったことでしょうか。怪談映画でも写真を使用したものなどもあるので、Jホラーにおけるメディアの扱いの先駆けとしての怪談という視点を加えてもよかったかもしれません。

「様々なコンテンツに感染するゾンビ」は、ジョージ・A・ロメロの『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』(1968)に始まるモダンなゾンビ像がどのように「増殖」していったかを、現在までの映画はもちろん、ゲーム、漫画、アニメ、音楽も視野に入れてまとめ上げた労作で、論者のゾンビ系コンテンツへの愛着がひしひしと伝わってきます。しかし、本論文は見通しのよいサーヴェイとしては面白いとはいえ、なぜゾンビが様々なコンテンツに感染していくのかという問いに答え切れているとはいえ、そもそも論文としての固有の論点が不在であることも否めません。これだけ該博な知識があれば、それを活かして、たとえば日本を含めた東アジア地域で西洋的なモンスター像が文化的交渉の過程を経てどのような変容を遂げたのか、あるいはまったく別の視点で、ホラー映画のモンスターがどのように一種の「キャラ」化を遂げてパロディ化されるに至ったのかといったより一般的な諸問題のひとつのケーススタディを展開することもできたでしょう。

「アメリカ映画における犯罪と逃避の系譜」は、『暗黒街の弾痕』(フリッツ・ラング、1937年)、『夜の人々』(ニコラス・レイ、1948年)、『拳銃魔』(ジョセフ・H・ルイス、1949年)といった古典から、『俺たちに明日はない』(アーサー・ペン、1967年)や『地獄の逃避行』(テレンス・マリック、1973年)を経て、『トゥルー・ロマンス』(トニー・スコット、1993年)や『ナチュラル・ボーン・キラーズ』(オリヴァー・ストーン、1994年)に至る犯罪逃避行を描いたアメリカ映画の系譜をたどった映画史研究で、これまた対象作品への論者の愛情が伝わってくる論文です。いわゆるヘイズ・コードやヨーロッパの映画史との関わり、メディアというテーマの扱いの差異など、興味深い論点も数多く盛り込まれている一方で、時間切れ気味だったことは否めず、この主題の系譜をたどることで何が見えてくるのか、そして特に近年の作品に関してはなぜこれらの作品を取り上げなければならないのかについては十分明確ではない点が惜しいところでした。

「『ハーモニー』論——生権力の臨界点」は、伊藤計劃原作のアニメーション映画『ハーモニー』(なかむらたかし/マイケル・アリアス、2015年)における「生権力」の描写を、ミシェル・フ

ーコーの「規律訓練型権力」とジル・ドゥルーズの「管理型権力」との比較において探っていく力作論文です。本論文のオリジナリティは、SF映画のイメージ造形を生権力論と結びつけて分析した点にあり、フリッツ・ラングの『メトロポリス』(1927年)からスピルバーグの『マイノリティ・リポート』(2002年)に至る作品群への理論の適用はおおむね納得のゆくものです。しかし同時に、権力論の応用の仕方はいささか図式的でもあり、究極的に作品の新しい読解を誘発するものであるかどうかは疑問の余地があります。また、フーコーとドゥルーズによる20世紀的な概念だけを参照項にして『ハーモニー』を論じるのではなく、ジークムント・バウマンなどの近年の監視社会論で注目されている論者を援用してもよかったかもしれません。とはいえ、こうした批判は、論文がすでに高い水準に到達しているからこそなされるものであることは付記しておきます。

「色彩による異世界表現——ドゥミとオゾンを中心に」は、テクニカラーまでの色彩映画の歴史を踏まえて、特にジャック・ドゥミの『ロシュフォールの恋人たち』(1967年)とフランソワ・オゾンの『8人の女たち』(2002年)に焦点を当てて、その「テクニカラー的」な色彩の使い方を「異世界」というキーワードも交えて考察した論文です。文献からの引用とみずからの作品分析がほどよくミックスされ、多様な論点を盛り込みつつも大きな軸はぶれずに一貫しているバランス感覚は見事なもので、なかなか真似のできるものではないでしょう。しかし、ドゥミの色彩設計をそもそも「テクニカラー的」と形容できるのかどうか、『8人の女たち』におけるオゾンの色彩感覚は「ベタ」というよりもむしろ「ネタ」として敢えてやっているものではないか等々、細かな疑問点が生じることも否めません。とはいえ、「色彩」は取り組みやすいようでいてかなりチャレンジングな主題でもあり、この論文は色彩映画論のひとつのモデルを作ったと言えるでしょう。

「恋愛を描くパズルフィルム」は、『メメント』(クリストファー・ノーラン、2000年)などを嚆矢とする「パズルフィルム」という語りの形式をとった恋愛映画として、『(500)日のサマー』(マーク・ウェブ、2009年)と『エターナル・サンシャイン』(ミシェル・ゴンドリー、2004年)を取り上げ、古典的な恋愛映画との比較を交えつつ、時系列を解体する理由とその演出効果について考察した論文です。本論文の白眉は『(500)日のサマー』を論じた章で、丁寧な作品分析によって、パズルフィルムの物語構成をとることでこの作品が何を隠蔽し、またどのような効果をもたらしているかを明らかにすることによりかなりの程度まで成功しています。その一方で、『エターナル・サンシャイン』はいささか論者の手に余った印象を受けます。『(500)日のサマー』を中心に据えて、パズルフィルム論はもちろん、物語理論やメロドラマ論も援用してより密度の濃い分析を行う方向性もありえたかもしれません。

「モーション・キャプチャーというテクノロジー——アナログ/デジタルを越えて」は、2000年代以降に急速に普及したCG技術のモーション・キャプチャーの歴史を辿りつつ、この技法の

根底には何があるのかを探った論文です。『ロード・オブ・ザ・リング／二つの塔』（ピーター・ジャクソン、2002年）に登場するゴラム、『猿の惑星／創生期』（ルパート・ワイアット、2011年）や『猿の惑星／新世紀』（マット・リーヴス、2014年）のシーザーたちの撮影の舞台裏にまなざしを向けることで、またそれらの「中の人」である俳優アンディ・サーキスの発言に耳を傾けることによって、モーション・キャプチャーという技法がどう発展してきたかを手際よくまとめています。最終的に、実際に俳優が演じていることによる「共感」（出演者どうしの、また出演者たちと観客との）を、フルCGには絶対に出せない特質として強調する論旨には疑問なしとはしないものの、論じたいことを直截に論じる伸びやかな態度にはもっと見習うべきでしょう。

「フランソワ・オゾン論——ジェンダー／セクシュアリティの観点から」は、短篇『サマードレス』（1996年）から『ホームドラマ』（1998年）や『焼け石に水』（2000年）を経て『彼は秘密の女ともだち』（2014年）にまで至る作品群を対象に、オゾンが登場人物たちのファッションの変化を介してジェンダー／セクシュアリティの変容をどのように描き出しているか、また家父長制からの脱却不可能性というテーマをどのように扱っているかを、批判的な観点から分析した論文です。オゾンはかなり理知的な映画作りをする監督ですが、論者はその意図を丁寧に読み解き、彼の作品が究極的には男性中心主義的な秩序を温存する装置として機能しているという批判も含め、水準の高い的確な読解を提示しています。欲を言えば、『焼け石に水』が基づいているライナー・ヴェルナー・ファスビンダーや、さらに遡って1950年代ハリウッドのダグラス・サークなどとの関わりにも多少触れていれば、論文に映画史的な広がりが出たかもしれません。

以上が9本の卒業論文に対する所見になりますが、今年度は残念ながら、映像文化専修から1名だけ選出される卒業論文優秀者表彰の対象者は、掘ゼミからは出ませんでした。とはいえ、『ハーモニー』論とフランソワ・オゾン論はきわめて高い評価を得たことを言い添えておきます。その他の論文も、多少のニュアンスの差はあれ、すべて一定の評価を得ることができました。どの論文にも、読み手を啓発するような優れた細部が——少なくとも部分的には！——備わっていますし、何よりも、執筆にかけられた——あるいは、かけざるをえなかった——熱意を指導教員としては多としたいと思います。呻吟しながら卒業論文を書き上げた経験を、是非とも今後の糧にしていきたいと願いつつ、筆を擱きます。